

ミヒヤエル・エンデの文学作品における自由の諸相

小 林 良 孝

ミヒヤエル・エンデ文学作品の中では、その物語の進展の方向が決定される重要な場面に到ると、あるいはまたその物語の主人公の運命が決定される重要な場面に到ると、必ずと言っていいほどいつも、明確に意識的に「自由」という言葉が持ち出され、あるいは「自由」という概念に属する言葉が持ち出されてきて、その「自由」にその物語の進展の方向の決定がゆだねられたり、その主人公の運命がゆだねられたりしている。

このことは、エンデが31歳の時の彼の処女作である『ジム・クノップ』2部作において既にあてはまることである。これの第2部『ジム・クノップと荒くれ13』の第25章「ジム、自分の生まれの秘密を知る」の章では、ジムによっていったん捕らえて縛りあげた12人の海賊の命を、ジムは助け、その捕縛を解く決心をする。ジムのこの寛大な処置に対して、海賊たちのうちの一人が答えて言う。「それにむくいておれたちは、おまえとおまえの友人たちに自由を与えてやることにするぞ。」⁽¹⁾こうしてジムの運命は決定されていくのである。

この自由というテーマは、エンデが年齢を重ねて行くにつれてますます重大なものとなっていったようで、彼が晩年に近づいていけばいくほど、彼の文学作品の中で占める自由の比重もますます大きくなっていくと同時に、自由の概念もますます進化していった。

1972年、彼が43歳の時の作品『モモ』においても、圧倒的な多数と圧倒的な圧力で迫ってくる灰色の男たちに対して、孤立無援ではあったけれども、モモはけっして彼らに屈することはなかった。つまり、モモは彼らに対する自由を貫いた。逆に、理髪屋のフージー氏や観光ガイドのジジ＝語り部のジロラモや道路掃除夫のベッポじいさんなどは、灰色の男に勧誘されたり、説得されたり、強迫されたりする場面では、灰色の男から明確な言葉で決定の自由を与えられながらも彼に屈服するのである。

1979年、エンデが50歳の時の作品『はてしない物語』は、部分的にはなく

この作品全体が子供にとっての自由の持つ意味を論じている物語であると言えるであろう。

1991年、エンデが死ぬ3年前、彼が62歳の時の作品『レンヒェンの秘密』は、誰が読んだって一目瞭然、これはレンヒェン（レナーテの愛称）の両親に対する我がまま（一種の自由）を主題とした作品である。

その翌年1992年、エンデが死ぬ2年前、彼が63歳の時の作品『自由の牢獄』は、内容を読まなくたって、その標題を見ただけで、この本は自由をテーマとして書かれてあるのであろうと推察される。実際に内容を読んでみると、何が自由なのかわかりづらい。けれども自由というものはそういうものなのだ。この作品を構成している一つ一つの短編は各々、エンデが63歳になるまで、自由について考えてきた所感を、つまり彼が発見したいろいろな自由の形態を、作品の形で述べたものなのであろう。

1993年、エンデが死ぬ1年前、彼が64歳の時の作品『満月の夜の伝説』は、10歳前後の読者にとってはとてもそうとは受け取れないかもしれないけれども、エンデが生涯かけて追究して到達した自由についての考えの頂点を示すものであろう。この作品は、自由というテーマを少しも感じさせない。しかしこの作品は、自由という問題と真っ向から立ち向い、四つに組んで全力で闘い取った、彼の総決算とも言うべき成果を表現しているものであろう。しかもこの作品は、彼の数多い短編の中でも最も充実した作品の一つである。

1994年、エンデが没した年、彼が65歳の時の彼の最後の作品『魔法の学校』は、小学生を相手に7課の教程の形をとって、魔法のかけ方を実習形式で説いた短編である。実はその教程内容は自由の実行の仕方にも通じることなのである。

以上のように、エンデの処女作『ジム・クノップ』の2部作から彼の絶筆となった『魔法の学校』に到るまでの彼の創作活動を概観すれば、「自由」というテーマは彼が年を取って行くにつれてますます重大なテーマとなっていたことは明確に読み取れるのである。彼の初期の作品においては、「自由」という概念は、まだ各々の作品の主人公の運命を決する根底的な状況として設定されていたにすぎない。しかし、中期から後期へ進んで行くにつれて、「自由」という概念はもはや各々の主人公たちの根底的条件として扱われている程度を超えて、次第に自由それ自体が、これは作品によっては、あるいは場面によっては、意志とか願いとか希望とかという形で、あるいは拒否とか反抗とかという形で表されることもあるが、次第に自由そのものが物語の主題として構想され創作されるようになっていったと見るのであろう。というわけで、本稿に

おいては、ミヒヤエル・エンデの文学作品の中では、自由というものがどういう形で、あるいはどういうものとして表現されているか、これらの点に焦点を絞って論じていくことにする。

I. エンデにとっての自由という問題の発端

ではまず、エンデにとってこの自由という問題は、いつ頃、どういう状況の中で、どういう意味を持つものとして浮上してきたのであろうか。これらの点に関しては、エンデ自身、子安美知子氏との対談の中で次のように語っている。

エンデ …私が30年以上にわたって、非常に集中的にシュタイナーの著作を読んできていることは事実です。

子安 だからこそ、この『私の読書』にも、冒頭の莊子に続いてシュタイナーの『自由の哲学』があがっています。それで、ぜひおうかがいしたい。エンデさんが、愛読書を選ぶ基準にしたのは、「私の人生の何らかの分岐点で道を方向づけ、決定的な影響を与えて、私を何らかの洞察にいたらしめた本、あるいはその後の人生ですっとかかえなければならぬような問をつきつけた本」だと、まえがきにあります。その意味でシュタイナーは、エンデさんに、いつ、どのような決定的出会いとなったのでしょうか。

エンデ まず父が、シュタイナーの思想に親しみ、それで私は父の口から彼の名をよく聞いてはいました。けれども自分から興味を持ったのは、25、6歳のころでした。もちろん17、8歳の時期、シュタイナー学校にも行っていましたが、そこで直接アントロポゾフィーを学んだわけではなく、卒業後はむしろ、アントロポゾーフと呼ばれる人たちには距離をおいていたのです。それからやがて、私はひとつの問にゆきあたった。いったいこの世に、生きたもの、魂をもつものについて何かを教えてくれる「学問」はないのだろうか？ なぜなら現代の学問は、みな自然科学的で、それは生命なき世界のことなら正確に知らしめてくれる。つまり物理学とか化学のことです。でも、その学問は、生きた事物を解明するには適さないことにぶつかっていました。そこで、私は魔術や錬金術の本を読みあさりました。その中で何人か新しい作家たちの名前が、くりかえし引きあいに出されていました。そしてシュタイナーの名は、ほとんど必ずもちだされていた。そこで初めて、私は自分から彼の本を買いました。『歴史兆候学』、それから『自由の哲学』です。この2冊を読んだのが決定的な出会いで、以来私はシュタイナーを手放せなくなったのです。⁽²⁾

この会談によれば、エンデ自ら興味を持ってシュタイナーを読み始めたのは、エンデが25、6歳の時だったという。その時エンデが特に興味を持ったシュタイナーの本は、『歴史兆候学』という本と、『自由の哲学』の本であったという。とすれば、エンデが自由の問題に自ら進んで取り組むようになったのも、彼が25、6歳の時からだったということになる。はたせるかな、それはエンデが処女作『ジム・クノップ』2部作を世に送り出した31歳の時よりさかのぼること5、6年も前の頃からだったということになる。

時期についてはそれはそれとして、エンデにとってこの自由の問題がぬきさしならぬ問題として浮上してきたのは、彼が心というものに関心を持ち、心を知るためにいろいろな著作家・思想家の本を読みあさっていた過程においてであったという。従って、エンデにとっては自由の問題は、心の問題という大枠の中の一つの問題だったのである。

では、エンデに「その後の人生ですっとかかえなければならぬような問いをつきつけた」シュタイナーは、どういう思想の持ち主だったのだろうか。シュタイナーは1919年に刊行した『社会問題の核心』という著書の中で、1789年に起きたフランス大革命の標語であった自由、平等、博愛に言及して、次のように述べている。

経済生活上の協力が「博愛」の精神に立脚していることをまずもって理解する。第二段階として、純粋に人間関係に基盤をおく社会生活上の権利関係においては「平等」の理念を実現すべきであろう。そして、社会において自律的な特性をもつ精神的領域においては「自由」の理念が確立されなければならない。⁽³⁾

エンデはシュタイナーの言説・思想をかならずしもすべて鵜呑みにしていたわけではないけれども、精神活動は自由の下に営まれなければならないし、経済活動は博愛の精神によって営まれなければならないし、法活動は万人に対して平等に営まれなければならないというシュタイナーの思想には完全に同感だったようである。その確信は、彼が65歳で他界するまで、強まっていきこそすれ、弱まることはなかった。エンデがシュタイナーのこの思想に自ら進んで取り組むことになった25、6歳の頃は、精神と自由の問題に最も強い関心があつて、政治（法）や経済については比較的、関心が弱かったようであるが、1972年、彼が43歳の時出版した『モモ』あたりから、経済と博愛の問題にも、批判的な形を取りながら関心を強めていったようである。とは言っても、心と自由の問題に対するエンデの関心は薄らいでいくどころか、ますます強まっていったと

いうことは既に見た通りである。エンデが53歳の時、1982年3月5日と6日の2日間に渡って、エンデと、政治と芸術との総合をめざす社会運動家ハンネ・テヒルと、政治家エアハルト・エプラーとの3人で行なわれた鼎談の中で、エンデは次のように言っている。

エンデ ぼくらはみんな…フランス革命の三つの理想を心に持っていて、それを実現したいと思っているようだ。あの、自由、平等、友愛という理想だ。…統一国家をつくって、そこで三つの理想を可能なかぎり実現しようと考えていたわけだ。そのさい、まったく気づかなかったこと、あるいは、気づこうとしなかったことがある。それはね、国の使命は、理想を三つとも実現することじゃなくて、ひとつだけ実現すればいいってことなんだ。使命から定義すれば、国とは、法律をつくり、適用しなければならない組織なんだ。そしてまた国という組織はたくさんの国民とかかわっているんで、法律をみんなのものにしなければならない。というわけで国は、三つのうち二番目の理想、つまり平等しか実践できないんだ。…

精神のこととなると、話がちがってくる。

「精神」の場合、厳密に言って問題になるのは、ただひとつ、個人の才能だけだ。ここでは、どんな一般化もまちがっている。…だが、そんなことをすれば「精神」のほんとうの課題を素通りすることになる。つまりね、ひとりひとりの才能をそれぞれ伸ばすという課題を避けてしまう。「精神」にかんしては、自由の理想があてはまる。「精神」は、できるだけ束縛されていないことが必要だし、「精神」は各人各様の能力に応じて、それぞれ独自のかたちで形成されなければならない。第三の理想は友愛だね。…あえてぼくは、友愛は近代「経済」に内在している掟である、と主張する。「経済」にたいして、例の「需要と供給の自由なゲーム」を適用させることはできない。そうすると「万人の万人に対する戦い」⁽⁴⁾となり、経済的に最も弱い者がいつも割を食うことになるからだ。…ともかくここでもまたもや、「経済」の交通整理は国の使命とはいえなくなる。…「経済」は、自前の機関をつくり出さなくちゃならない。国には従属しないものをね。たとえば、独立した消費者共同体とか生産共同体といったような機関だ。こういう考えが何に基づいているか、…まず第一にフンボルトの「国家の権力の限界について」…というエッセイだ。それからね、ルドルフ・シュタイナーが始めた社会有機体三層化運動の中で、その考えは詳しく論じられ、精密に練り上げられている。⁽⁵⁾

本稿では、「自由」の問題に焦点を合わせてエンデの文学作品を読み解いていくことにしよう。そこでまず、エンデが25、6歳頃出会い、その後ずっと生涯の間、彼に抜き差しならぬ問題をつきつけてきた自由の問題のきっかけとなったシュタイナーの『自由の哲学』という本を、エンデとの関係において概観してみることにしよう。この本の第I章「意識的人間の行動」は、次のような言葉で書き起こされている。

人間は、思考と行動において精神的に自由な存在なのであろうか、あるいは純粹に自然法則的な堅固な必然性下にあるのだろうか。この問題に対して程多くのすぐれた洞察力がそそがれてきた問題は多くはない。人間の意志の自由という理念に関しては、頑固な反対者が多数いたと同様に、熱烈な支持者もたくさんいた。自由のような明々白々たる事実を否定する人を道徳的な情熱をこめて偏狭な精神の持ち主だと宣言する人もいる。こういう人々に対峙して、人間の行動や思考の領域では自然の法則性は通用しないと信じている人がいることも事実だけれども、正にそのことはその人の非科学性の極みであるとしている人々もいる。ここでは、全く同一のものが、かたや人類の最も貴重な宝であると宣告され、かたや最もいとわしい幻影であると宣告されているのである。⁽⁶⁾

まず、ここで提起されているのは、人間対人間の社会領域での自由の問題ではなく、個人としての人間の精神と行動の領域での自由の問題である。この領域において、そもそも人間は自由な存在なのか、それとも自由ではない存在なのかという、自由についての最も根本的な問題が提起され、ついで、この問題に関する古来からの人類の叡知がたどりついた結論が客観的に簡潔に紹介されている。要するに、一方の人々の結論としては自由は存在する、他方の人々の結論としては存在しないのである。自由の問題に関して更に進んだ客観的な結論を筆者として出すとすれば、自由の問題は論理的には解決不可能な問題であるといわざるを得ない。自由の問題は、アリストテレスの用語の意味において典型的なアポリアなのである。

では、理論としてではなく現実として、人間の思考や行動は自由に行なわれているのか、何らかの強制によって行なわれているのか、という現実の意識の問題としてみれば、今度はその現実の具体的な条件によって、ある人は、ないしはある場合は、明白に、純粹に、確実に、存在することもあるし、存在しないこともある。

いうまでもなく文学作品は、論理学でもないし、ありのままの現実の純粋な書き写しでもない。とはいえ、文学作品は論理と無関係でもあり得ない、と同時に現実と無関係でもあり得ない。エンデの文学作品の場合、当然のことながら彼自身の生活体験としての現実が確固たる基盤となっている。その上で、エンデの文学作品は、この自由の問題に関しては、シュタイナーの『自由の哲学』理論と強い関係を持っているのである。シュタイナーは、精神一元論、特に直観に基づく自由の存在の主張者である。自由の問題に関しては、エンデはシュタイナーに対して強い親近感を持っていたと見ていいであろう。エンデは、子安美知子氏との対談の中で次のように語っている。

エンデ …現代の世界はすべて、因果律的論理の上に構築されています。テクノロジーは、つねにこの論理の枠内にとどまらなければ機能しません。…しかし、こと人間となると違ってくるはずです。人間には、原因・結果の論理だけでは規定しえない面が、はっきりあります。私は、今日の自然科学の方法による人間像に、断固として異議を唱えます。科学が人間をも因果論で説明しようとするやり方に――。…

直観が因果関係によって生じてくることは、決してない。不可能なことです。ただ、それは無前提に生まれる、という意味ではありませんよ。前提がない、ということと、因果関係ではない、ということとはよく区別しておきましょう。世界のあらゆることがらに、前提はいつもあります。でもそれは、未来を規定する条件ではない。…因果律を人間にあてはめるとしたら、そこには自由が存在しない。そして、人間の中に自由がないとなると、創造力も認めないことになります。人間の創造性というのは、いつも因果律的束縛なしに、何かまったく新しいものを、自分の中から生み出すことです。新しい芸術フォーム、新しい理念、新しい行動様式、それを自分の中から出してくること。そしてまさにその中にこそ、人間の価値があると私は思います。これが人間と動物とを区別するものでしょう。…新たな始まりをつくり出す力こそ、神と人間に共通する力だし、人間の真の価値なのです。⁽⁷⁾

ここでは引用から省いたけれども、エンデは人間の自由の問題を人間以外の動物、たとえばミツバチとの対比において論じている。エンデの主張によれば、動物の行動は完全に本能に束縛されている。本能は自然科学の依拠している因果律に完全に束縛されている。従って、動物の行動は因果律に完全に束縛されており、動物の行動には自由はない。これに対して人間の精神は、決して完全

に本能に束縛されているのではなく、動物は持っていない「直観」という能力をも持っている。人間の持っているこの直観は、神の創造力と共通のものであって、決して現代の自然科学の依拠している因果律に束縛されているのではない。従って、この限りでは人間の精神は現代の自然科学が依拠している因果律から自由である。つまり、人間の思考や行動は、現代の自然科学を成り立たしめている因果律によっては、必ずしも完全に束縛されているものではない、という主張なのである。エンデは、河合隼雄氏との対談の中でも次のように言っている。

エンデ 私は自然科学者たちが、自分たちの自然へのかかわり方を、互いの関係性の中の一部に過ぎないと認識している限りは、そのかかわり方を否定しません。同じように人間を自然科学的に扱うことも、否定しません。けれども、それがすべてだと言ったとき、それに対して私は言います、あなた方は間違いを犯しているばかりではなく、犯罪をも犯していると。

大脳生理学者が、日々の仕事としては教壇で、すべての人間の意識は電気化学的なプロセスの総体であると説明する。…⁽⁸⁾

これに続いて、エンデは大脳生理学者のこの説に反論する。エンデの主張によれば、自然現象である電気化学的なプロセスによって、矛盾なく説明できるのは、パブロフの犬の条件反射とかミツバチの六角形の巣を作る本能とかの動物の意識行動のみであって、人間が持っているような不死の魂の信仰とか、道德観念とか、自由な決断とかいったものはこれによっては説明できない、と言うのである。人間だけが持っているこれらの意識活動を電気化学的なプロセスによって説明するのは矛盾である、と言うのである。河合隼雄氏との対談の中ではこれ以上進んだ考えは述べられていない。動物は持っていない人間だけが持っているエンデが言う自由な決断とか、道德観念とか、不死の魂の信念などの意識ないしは観念は、電気化学的なプロセスではないと、断固として主張するだけで、ではそれらは何なのか、ということについては、河合隼雄氏との対談の中では何も述べられていない。この河合隼雄氏との対談と、先に引用した1986年に行なわれたエンデと子安美知子氏との対談を総合して考えてみれば、人間だけが持っている自由な決断とか、道德概念とか、不死の魂の信念などは、自然科学の因果律に束縛されていない彼のいわゆる「直観」に属するものである、ということになるのかもしれない。

我々はまた、1982年に行なわれたエンデとエプラーとテヒルとの鼎談の中で、エンデは、「精神」にかんしては自由の理念が無制限にあてはまる⁽⁹⁾、と主張していることも知っている。他方、伝統的には、精神は理性、感情、意志の主体

であるとされている。これと、エンデと子安氏との対談を総合すれば、人間の理性も感情も意志も、自然科学の因果律に束縛されないという結論になる。更にこれを、エンデと河合氏との対談と総合すれば、人間の理性も感情も意志も、これらはいずれも電気化学的なプロセスによって必ずしも完全に説明され得るものではない、という結論になる。ところで、現代の科学では、人間の理性活動（真偽を論証する能力・真偽の判断能力）や、情動（美・快なるものを求め、醜・不快なるものから遠ざかろうとする情動）や、行動の引き金である意志決定などは、大脳皮質で行なわれるとされている。とすれば、そしてまたエンデの主張とおぼしき結論が正しいとすれば、大脳皮質において理性の活動が行なわれても、情動が強く働いていても、意志決定が下されても、大脳皮質において発生し、進行している電気化学的なプロセスによって必ずしも完全に束縛されているのではない、という結論になる。とすれば、自然科学の立脚している因果律に束縛されていないのは、すなわち因果律から自由なのは、とりわけ「直感」だけであるということではなく、理性も感情も意志もそうであるということになる。「直感」の特異性は、因果律から自由であるという点にあるのではなく、神の創造のわざに共通する能力である、という点にあるのだ。

人間以外の動物が持っていない人間特有の創造的能力といえ、1991年にNHKが企画した「アインシュタイン・ロマン」の取材陣の質問に対して、エンデが答えた次の言葉も思い出さざるをえない。

子供にとってオアシスたり得る児童文学は、大人にとってもオアシスなのですね。「文明砂漠」の遊びを忘れた大人たちこそ、もう一度、本当の子供のもつ素晴らしさを思い起こさせたいのですが。

エンデ それに必要なのは、創造力ではないでしょうか。人間の創造力とは人間の「永遠の子供らしさ」そのものです。…

人間における本来の人間らしさとは、この創造的な能力にあると思います。人間とはこの世で唯一の創造的であり得る生き物なのです。つまり、本能とか生存規則とかに拘束されていない生き物です。蜜蜂は、突如、六角形の蜂の巣のかわりに五角形のものをつくることはできません。…

それにひきかえ、人間は際限なく新しい形を作り出せますし、際限なく新しい概念を考え出すことができます。これが、私がファンタジーをあれほど重要視する理由です。

なぜなら、ファンタジーとは新しい概念を考え出すこと、すでにある概

念を新しい関連におきかえることにほかならないのですから。つまり創造力そのものです。⁽¹⁰⁾

子安氏との対談の中で、「直観」に関して主張されていたことと全く同じことが、ここでは「ファンタジー」に関して繰り返し主張されているのである。ここでエンデが言っているファンタジーも彼の言う「直観」と同様に、本能（大脳生理学者が言う電気化学的プロセス）という自然科学的因果律の拘束を受けずに、「新しい形を作り出す」能力、あるいは「新しい概念を考え出す」能力のことなのである。従ってエンデの言うファンタジーとは、空しい想い、すなわち空想ではなく、新しい形・新しい実像を想い描く力、すなわち想像力というべきものである。エンデの言うファンタジー（想像力）というのは、直観能力とならぶもう一つの創造能力なのである。

人間が行動する場合、その行動に方向を与えるのは意志である。人間が考えながら、ないしは意識的に行動する場合、その意志に方向を与えるのは、その人の感情であったり、理性であったり、更にエンデの考えに従えば、創造的な直観であったり、創造的な想像であったり、いろいろである。創造的な直観に基づいて意志決定が行われたり、創造的想像に基づいて意志決定が行われ、更にそういう意志に基づいて実際に行動が実行される場合、そういう行動は、人間以外の他の動物には見られない新しい行動であったり、過去のいかなる人間行動にも類を見なかった新しい行動であるはずだ。実際、時代の進行と共に、人間はこの種の新しい行動をくり返してきた。人間には、創造的に新しい行動をする能力・自由がそなわっていると同時に、その新しい行動を規制する新しい能力・自由、すなわち新しい行動を規制する新しい倫理観、更にこの新しい倫理観を実践する新しい道徳もそなわっているというのが、エンデの更に踏み込んだ主張なのである。そして、人間が持っている新しい道徳の創造力を表現する言葉が、シュタイナーと共にエンデが強調する「モラーリッシェ・ファンタジー」（道徳的想像力）なのである。エンデの現代文明に対する危機感は、自然科学偏重の現代文明がこの「モラーリッシェ・ファンタジー」を疎外しているという認識にもとづいているのであろう。

自由の存否が問題となるのは、上でエンデが論じているように、精神と因果律との関係においてのみではない。まず、人間は精神のみで存在しているわけではない。人間は、精神と身体＝肉体との生命的結合体なのである。それ故、人間と因果との関係で自由の存否を論ずる場合には身体と因果律との関係からも考察しなければならない可能性はある。しかしエンデは、この局面での自由

の存否については深入りしようとしなない。

更に人間においては、理念と実行能力との関係においても、意志決定と実行能力との関係においても、自由の存否は問題となるであろう。

以上は個人としての人間にまつわる自由の存否が問題となる局面であるが、こういう問題を抱えている人間は何らかの他者との関係の中で存在しているのである。従って、自由は自分と他者との関係においても、その存否が問題になる。もしも、「あなたは自由ですか？」とたずねられたとしたら、普通の人々はまずは自分と他人との関係を考えてみるであろう。

もしその人が、政治に関心のある人ならば、政治権力関係上の自由を考えるであろう。

もしもその人が社会学者ならば、まず自分と社会との関係を考えてみるであろう。

もしもその人が心の病に関心を持っている人ならば、自分と環境との関係や、過去から現在に到る心の経歴を考えてみるだろう。

あるいは、その人が歴史に関心を持っている人ならば、自分と歴史との関係を考えてみることであろう。

もしもその人が宗教に関心を持っている人ならば、自分と神仏との関係を考えてみるであろう。

その他、人は場合によっていろいろなものとの関係の中で生きている。そしてそれらの関係の中で、「私は束縛されている、不自由だ。」と感じたり、「私は束縛されていない、自由だ。」と感じたりする。

「自由である」・「自由でない」の問題として、もう一つには主観と客観の問題がある。「私は束縛されていない、自由だ。」と思っている、他人から見れば事実として束縛されている場合もある。「自由である」にしても「自由でない」にしても、主観と客観が一致している場合もあるし、一致していない場合もある。

以上のように「自由である・自由でない」ということについてただ概念的に考えるなら、おおまかに考えてみただけでも実に多くの自由の形態があり得るのである。

では、エンデは、自由をめぐる問題を、あるいは自由そのものを、文学作品としてどのように描いているのかを見てゆくことにしよう。

Ⅱ. 「暗」としての自由

既に検討したように、エンデは自然科学の立脚している因果律からの人間精

神の自由の断固たる支持者である。それは、彼が25、6歳頃出会ったシュタイナーの『自由の哲学』によって意識化された問題であった。それから死ぬまで40年間近い間エンデ自身が考えに考え抜き、人生体験を積んでたどり着いたゆるがない確信であった。しかしその確信は「人間は自由ではない、人間に自由はあり得ない」とする彼と反対の立場をとる思想との対決の中で、あるいは自問自答の中で強められてきた確信であった。それ故、エンデは自由を否定する人々の論拠もよく知っていたことであろう。自由を否定する思想は、自由を肯定する思想と同様、文学創作の恰好のテーマとなり得るのである。

『鏡の中の鏡』の中に、「サーカスが燃えている。」という文で始まる短篇がある。1938年11月10日の夜の「水晶の夜」のような暴動でも起きたのだろうか。路上にはたくさんの自動車が乱雑にひっくりかえされていて、その何台かはまだくすぶっている。路上には割れた窓ガラスが足の踏み場もなく散らばっている。死んだ犬をまたいで、しばらく行くと路上にたまった油の中に鳥が死んで仰向けになって浮かんでいる。サーカスの道化師が、そんな路上を足の踏み場に窮しながら歩きながら、次のように考える。

おれの存在は不可解でこっけいだ。しかし、おれが自分の決断で自分の他の存在を選び取ったことなんか一度だってなかった。人は誰だって、現に今そうである人でしかありえないのだ。自由はいつも未来にあるにすぎない。過去の中に自由を探したって見つかるものではない。誰だって別の過去を探し出すなんてことは出来ないのだ。現に起きていることはすべて、そうなるべくしてそうなったものなのである。事後になってみればすべては必然的である。前もって考えてみれば必然的なものなど一つだってありやしない。大切なことは夢から覚めることだ。それにもかかわらず、我々は自由を追いかける、追いかけることしか出来ないのだ。しかし、自由は蜃気楼のように、いつも我々の一歩先にある、いつも次の一瞬にある、いつも未来にある。そして未来は闇だ、我々の目の前の通過不可能なまっ黒な壁だ。いやそうではない、未来は我々の両方の眼を串刺しにして侵入して来て、更に我々の頭脳を刺し貫いているのだ。我々は盲なのだ。未来によって盲目にされているのだ。我々は我々の目前にあるものを一度だって見ることはない、自分たちの鼻先にぶつかるまで、次の一秒たりとも見ることは決してない。我々に見えるのは、既に我々が見たものだけだ。ということつまり、我々には何も見えないということだ。⁽¹¹⁾

ここで道化師が考えていることは、次の事である。

一、過去において、彼自身の自由な決断で彼自身の他の在り方を選び取ったことなど、一度だってなかった。つまり、過去においては自由は存在しなかった。

二、現在おきていることはすべて、過去からの必然性によって起きているのである。それ故、現在においても自由は存在しない。

三、未来には、自由は存在すると我々は思い込んでいる。しかし、未来は永遠に未来であり、未来に存在する自由は、永遠に未来にしか存在しない。ところが我々には一秒先の未来も見えない。未来に対しては我々は完全に盲目的なのである。従って、未来に存在する自由など、我々には見えるはずがないのである。存在すると思っているのは思い込みにすぎない。我々は存在していない自由をあると思いこんでいるにすぎないのだ。それを「存在する」と見ているのは夢を見ているにすぎない。我々にとって肝心なことは、この夢から覚めることである。

結局のところ、過去においても、現在においても、未来においても、自由は存在しない、ということが、この道化師の結論なのである。

必然性ないしは運命に束縛されて生きてゆくしかない人間の姿を、客観的に視覚的に表現しているのが、球の上を走り続けているねずみの姿である。道化師が、乱雑をきわめた暗い市街をそんな物思いにふけりながら更に歩いて行くと、不意に人だかりのしている明るいショーウィンドーの前にたどりつく。そのショーウィンドーの中には、上から糸でつりさげられているのでもなく、下から棒や台で支えられているのでもなく、一つの球が宙に浮かんでいる。そして、その球の上にはその球とさほど大きさの違いのない一匹の大ねずみが乗っかっている。ところがその球は、そのねずみの意志や決断や選択とかには全く関係なく、球の勝手ないろいろな方向に、かつその球の勝手な速度で、速くなったり遅くなったりして、回転し続けているのである。その上に乗っかっているねずみは、その球から滑り落ちまいとして必死になって、球の回転速度と同じ速度で、そしてその球の回転方向と正確に逆方向へ、走り続けなければならないのである。その球の下には、見るも恐ろしい毒虫や蛇どもがうじゃうじゃ、落ちてくるねずみのごちそうにありつこうとして、毒針をもたげ、口を開けて舌なめずりをしながら待ちかまえているのである。生きるつもりなら、このねずみには、今ある自分の存在とは別の自分の存在を自分の自由な決断で選択することは不可能である。今までもそうであったし、これからもそうなのである。ひょっとしたら、このねずみは我々人間なのかもしれないのだ。このねずみの

寓話は、実に見事に人間に自由は存在しないことを描いている。

では、人間の自由な決断の存在を、人間の精神の自由の存在を固く信じているエンデにとって、このねずみの寓話は何の意味があるのであろうか。エンデは、田村都志夫氏のインタビューに際して次のように言っている。

エンデ …ルドルフ・シュタイナー（の思想）から学んだことの多くは、私にとってきわめて大切なことですし、生に対する私の考えそのものの、決定的な礎石なのですが、しかし、芸術に関しては、その限りではない。シュタイナーの芸術思想は、どうしても私には受け入れることはできないし、今でも間違いだと思っています。なぜかという、ひとことで言うならば、

「暗黒が欠けている」

と言えるからです。

どの芸術であれ、詩でも、絵画でも、楽しく明朗な絵画でさえ、どこか暗黒を持っていなければならない。…そうでなければ、明るさにしても何の値打ちもない。

人智学の絵画をご覧になれば、どれも暗黒が欠けています。そして、そのために奇妙に植物的となり、少しばかり血が欠ける感がある。鋭さもない。⁽¹²⁾

とすれば、『鏡の中の鏡』の中のサーカスの道化師の考え、すなわち、自由な決断などは過去にも現在にも未来にも存在しないのだという思想は、エンデの芸術としての文学における暗黒部分なのである。この暗黒の部分の自由があるからこそ、エンデの本音の自由、いわば明の部分の自由は、価値を持ち、鋭さを増し、鮮明に輝いて見えてくるのである。この道化師の考えている「自由は存在しない」という自由は、エンデのいわゆる「^ア暗」としての自由なのである。

では次に、エンデの言う「^{メイ}明」としての自由、つまり本来の意味での自由、ないしは普通の意味での自由が、エンデの文学作品の中でどのように表現されているかを見ていくことにしよう。

なんらかの意味では、あるいはなんらかの程度では、エンデの短篇、長篇を合わせて数多い作品のほとんどすべての作品において、「自由」は表現されている、ないしはその物語の進展の鍵となっている。自由をその作品の第一テーマとして、その作品全篇を通して、自由を追求している作品もあるし、他のテーマを追求しながら、その第一テーマの追求に不可欠な契機として自由が登場し

